



先週、昨夏他界した義理の父の一周忌が有りました。今回は、義父の思い出話を書かせていただきます。入院してから3ヶ月間の闘病でした。七くなる5日前には、男と男の約束をさせていただきました。その時、父は父らしく深くその時を待つ心の準備をされていた様に感じました。



父は、とにかく義理人情に厚く、自分をどこまでとてくれ、その接していただく姿から、数々の事を学びさせていただきました。ものすごく勤勉な方で、朝は3時に起きて自宅近くの工場です時内程働いた後に、都内の会社へ出勤し、夜帰ってくる。そんなスケジュールで働き続けられた日本一の働き者でした。

19年前、初めて挨拶に御伺いさせて頂いた時には「厳格で怖くてとても難しくお父さん」と聞いていたので、恐る恐るの訪問でした。お話をさせていただくと、とてもやさしい方で、シュッとした印象だった事を思い出します。それ以来、自分にとっては、本当に天使のような人でした。



14年前、この会社を創業する際にも、事前に作製した事業企画書を見ていただき、アドバイスをいただいた事が昨日の事の様です。会社でイベント事が有れば、お土産を手配必ず、激務に来ていただき、「あまり無理せずね」とやさしい声をいつも掛けてくださいました。又、3人の子供達にもこれまでに余りあるほどの接遇を教え切れないほどに頂戴し、本当にありがたい存在でした。

お酒は、ほとんど飲めませんでした。食事を一緒にさせていただく時には、必ず一杯付き合っていた。飲めないにも係わらず、自分の好きな焼酎を毎回一本必ず買って来ていただき、振舞っていただきました。旅行でも食事会でも、とにかく皆に楽しんでもらいたいというサービス精神が旺盛で毎回、毎回、皆が満足する様に取組んでくれたものです。



いつしか、そんな父の人柄や行動は、今では自分でも近づきたいあのがらの目標の存在になっています。数えきれないほどの思い出をくれた父が、自分の父で有ってくれた事が、今では、かけがえのない宝物です。手前みよな話になりましたが、自慢の父で友人にもお酒を飲みながら、良く自慢したものでした。家族の中心人物がなくなり、寂しくなりますが、少しでもお父さんに近づける様、出会った人には、お父さんのように接する事が出来る様、心に掛けていきたい想いで、ありがとうございました。

平成二十二年七月吉日 多田良雄